

ダイチとおおきい木

(上演時間 約30分)

作・清田明世

● 登場人物

だいち(年少〜年長)

あさひ(年少〜年長)

たつや(年少〜年長)

ゆみ(年少〜年長)

ももこ先生

だいちのお母さん

さくら(年少)

さくらのお母さん

※芋を引つ張る先生たち(エキストラ)

● 作者より作品について

お母さんから離れたくなかった初めての登園。ともだちができるか不安だった初めてのクラス。ここ遊びやまねっこ遊びが好きだった年少時代。周りと関わることができるようになった年中時代。年下を思いやる気持ちが芽生えた年長時代。子どもたちは、幼稚園・保育園での数年間で大きく成長しました。

おおきい木も、最初は小さな種でした。小さな種に願いを込めて、大事に育てる人がいることで、種はやがておおきい木になっていきます。卒園を控えた子どもたちへ、おおきい木が贈ったプレゼントは、この年齢の子どもたちにはやや難しい「暗号」だったかもしれません。暗号が解けた子も解けなかった子も、それぞれの胸にこのプレゼントを抱え卒園の日を迎えてくれると信じ、この作品を書きました。

「さくらさくらさくらさくら。さくらさくらさくらさくら。」

● 小道具

段階を踏んで大きく伸びる木(大きくなる様子は、段ボールを重ねたり、模造紙に描いた絵を足していくなど、各園で工夫してください。)、芋(新聞紙などを丸めて作ったもの)、探検隊の道具(園児が工作できるようなもの)、クリスマスの飾り、じょうろ、小さな種、雪(雪合戦で使う、紙を丸めたものなど)、プレゼントの箱、手紙、クリスマスの帽子(あれば)

● 歌を

この作品のキーワードは、「プレゼント」です。ラストシーンで、それが何であるかは、抽象的になっています。園児たちによりこの「プレゼント」を伝える為に、大人は歌を歌ってあげると良いでしょう。子どもたちの成長や、思い出を振り返るような歌をおすすめします。

○入園

舞台、下手に幼稚園の表札と門。

エロン姿の先生が、園児の登校を門で迎えている。

反対側の上手から、お母さんに（強引に）引つ張られるように、年少のだいちが泣きながら出てくる。

えーん。えーん。いやだよお！

だいちくん、そんなこと言わないの。

行きたくないよお。幼稚園なんか行きたくないよ！

だいち、お母さんに引つ張られながら、やっと幼稚園の門に辿り着く。

だいちくん、おはよう。

だいち、泣いている。

先生、今日からどうぞよろしくお願いします。

じゃあね、だいちくん。いつてらっしゃい。

いやだ、いやだ、ママー！

先生、お母さんにしがみつくだいちの両手をとり、屈んで目線を合わせる。

だいちくん。いいものあげようか。

まほうの種だよ。

この種はね、だいちくんの願い事を叶えてくれるよ。

ねがいごと？

毎日ね、お水をあげて、こうなったらいいな、と思うことをお話ししてあげるとね、この種がだいちくんのお話をきいてくれるの。

だいち、じーっと、種を見つめる。

だいちくん、植えてみる？

登園をかなり渋っている

様子

踏ん張って抵抗する

お母さん困った顔

お母さん、だいちをが引つ張る。

明るく

困った顔で、頭を下げる。何とかその場を去ろうとする。

お母さんの腕にしがみつく。

お母さん、そのすきにそそくさとは舞台からはける。

だいち、涙をぬぐいながら先生をみる。

種を観客に見えるようにして、太郎の両手に握らせる。

ももこ先生

ももこ先生

だいち

ももこ先生

だいち

お母さん

ももこ先生

だいち

お母さん

だいち